

バルザックの *œuvres diverses* の諸問題

鎌 田 隆 行

キーワード：バルザック、19世紀フランス文学、生成論、エディション

1. 研究の背景

バルザックにおける *œuvres diverses* は依然として検討すべき多くの課題を残している作品群である。本稿はそのエディションの構成上の諸問題を検討することを目的とする¹。

原語で記した *œuvres diverses* (以下、ODと略す) は、字義通りには「雑録」などと訳せよう。バルザックの場合は、主著『人間喜劇』に収録されていない「その他の諸作品」を指す。ただし、青年期に刊行した小説、十輯からなる大作の計画のもとに三輯を刊行した擬古文の『コント・ドロラティック』、壮年期の戯曲はそれぞれまとまった分量を形成しているため、「『人間喜劇』以外の主要作品」としての独自のステイタスを与えられる場合もあれば、ODを構成するものとして扱われる場合もある。

研究史的に見るならば、バルザック研究者はODに対して関心と躊躇という両義的な態度を示してきた。たしかに、バルザックの「全作品」は『人間喜劇』、そしてこの作家が執筆した他の多くの諸作品からなるという理解のもとに、その網羅的な集積を目指すべきであること、知られざる作品を発掘・提示し、それに対する解釈を深めていくのが重要であることについては研究者のコンセンサスが取れている。実際、青年期の作品、『コント・ドロラティック』、戯曲作品など個別の作品(群)の研究においては、重要な調査と分析がなされてきた。しかし、そうでありながらも、全般的にバルザック研究者は膨大な量のODの作品群(後述するように、プレイヤー版のフォーマット換算で三巻分を超える)を『人間喜劇』に比べて二義的存在として扱い、この作家の創作世界において後景に押しやってしまうことが少なくない。ありとあらゆる主要なテーマが重厚な研究の対象となってきたこの作家にあって、ODの包括的な問題はいまだに研究書(単著、共著)や博士論文の主題として扱われたことがない。こうした微妙で時に冷淡な扱いの背景にはおそらく三つの主な理由があると思われる。

第一に、作者自身がこれらの作品を周縁的なものと位置付けたことである。バルザックの最も重要な事績である『人間喜劇』は、『バルザック氏の全集』と銘打たれて1842~48年に刊行された²。同エディションの「総序」で作者は次のように述べ、自作の範囲を極めて狭

¹ 本稿で使用している基礎情報は、『バルザック事典』に収録された次の二件の拙稿に基づく。Notice « Attribution », in Éric Bordas, Pierre Glaudes et Nicole Mozet (dir.), *Dictionnaire Balzac*, Classiques Garnier, 2021, p. 105-109 ; notice « Œuvres diverses », *ibid.*, p. 927-930.

² *LA COMÉDIE HUMAINE. Œuvres complètes de M. de Balzac*, Furne, J.-J. Dubochet et Cie, J. Hetzel [et Paulin], 1842-1848, 17 vol.

く限定している——『人間喜劇』以外では、私の手によるものは『コント・ドロラティック』、戯曲二作品、そして署名をしたいくつかの個別の記事である』³。このように著者は、自身が『人間喜劇』以外の場で進めてきた作品の大半を否認しているとも取れる身振りを行っているのである。だが、この言明は「作家バルザック」による『人間喜劇』のプレゼンテーションにおける発話状況と言説戦略の力学において理解すべきであろう。「総序」の発話構築の観点からして、『バルザック氏の全集』である『人間喜劇』は社会を余すところなくトータルに描き出すという設定であり、『人間喜劇』を聖化して自身の活動の中心に据え、それ以外のテキストを周縁化する作者の意図と方向づけが見られる。網羅的で堅固な大作であるべき作品＝「全集」の「外側」に大きな領野の存在を示すことは自己演出的なセノグラフィの戦略を弱化してしまうことになる。これが周到に回避されているのである⁴。「総序」におけるこの言明は、他のパラテキストと連動し、特に1822～25年に刊行された初期小説（8作品）を除外しようとする意図を垣間見せる。フェルヌ版で『ふくろう党』に付され、かつてバルザック一家と懇意であった知人テオドル・ダブランに宛てられた献辞には、「最初の友へ、最初の作品を」と記されている⁵。1829年に初版が刊行された『ふくろう党』（初版時の題名は『最後のふくろう黨員あるいは1800年のプルターニュ』）を自身の創作の初穂と規定することで、バルザックはそれ以前の決して少なからぬ創作物の刊行実績の否認を間接的に、そして搦め手から——献辞文は発話行為上は読者に宛てられていないが、内容的には読者をターゲットとする——行っているのだ。文名高まったバルザックが、自身のプレステージを傷つけないために、かつて共作者とともに「キャビネ・ド・レクチュール」向けの通俗的な小説の制作に関与していたことを隠蔽しようとしたのは確かである。実妹ロール宛の1835年11月の書簡に見られるように、変名で書いたこれらの作品を「バルザック」のものであると明かしたくないことは以前からほのめかしていた⁶。だがそこには、より存在論的な問題が絡んでいる。ピエール・バルベリスとロラン・ショレが詳しく跡付けた通り⁷、バルザック、というか作家サン＝トーバンは1824年に自らの作家活動に行き詰まりを覚え、匿名で刊行した『ヴァン＝クロール』（1825）を以って「キャビネ・ド・レクチュール」向けの作品制作を打ち止めにした。その後書き（結局、版本には付されなかつ

³ Balzac, *La Comédie humaine*. Édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol. (以下 *Pl.* と略), t. I, p. 20. 「戯曲二作品」とは、『ヴォートラン』、『キノラの手だて』を指すとされる。

⁴ 作者自身が生前からこのような「全集」を規定するという独創的な挙措については、次の二つの論考を参照。Claude Duchet et Isabelle Tournier « Avertissement quasi littéraire », in Claude Duchet et Isabelle Tournier (dir.), *Balzac, Œuvres complètes. Le « Moment » de La Comédie humaine*, Presses Universitaires de Vincennes, 1993, p. 9-18 ; Claire Barel-Moisan, « *La Comédie humaine* : les œuvres complètes comme totalisation infinie », in Béatrice Didier, Jacques Neefs et Stéphane Rolet (dir.), *Composer, rassembler, penser les « œuvres complètes »*, Presses Universitaires de Vincennes, 2012, p. 243-260.

⁵ *Pl.*, t. VIII, p. 905.

⁶ Balzac, *Correspondance*. Édition établie, présentée et annotée par Roger Pierrot et Hervé Yon, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2006-2017, 3 vol., t. I, p. 1148.

⁷ Pierre Barbéris, « Les adieux du bachelier Horace de Saint-Aubin. Autour d'une page inédite », *L'Année balzacienne* (以下 *AB* と略), 1963, p. 7-30 ; Roland Chollet, « Du premier Balzac à la mort de Saint-Aubin. Quelques remarques sur un lecteur introuvable », *AB1987*, p. 7-20.

た)において、作者は文学への決別を告げている⁸。ここに一つの断絶がある。作家サン＝トーバンの「死」を乗り越えて初めて作家バルザックが誕生しているのである。そうであれば、サン＝トーバンの死によって贖われて存在しえた「作家バルザック」が、自らの最初の作は『ふくろう党』であると表明しているのは決して奇異なことではない。バルザックが、自身の名を明かさずに初期小説を『サン＝トーバン全集』(1836～40年)としてスヴラン社から再刊したことも——商業的理由があったにせよ——、この点から理解されよう⁹。実際、バルザックが『人間喜劇』以外の大半の自著の価値を否定的に捉えていたとする見方は、生成論的には肯定しがたい。ロラン・ショレは、バルザックが新聞や雑誌に寄稿した掌編のうち多数を再利用して『人間喜劇』に取り込んだこと、また青年期の中断した習作の草稿を入念に保存していたことを指摘し、自身のさまざまなテキストが読解対象となることを期待していた証左であるとしている¹⁰。後述のプレイヤード版 OD の編者であるこの碩学が強調するように、いまだ十分に知られざる「もう一人のバルザック」は名誉回復されるべき存在なのである¹¹。

だが、実際にこれらのテキストに接近しようとする、次に待ち受けているのは文献学的困難である。これが第二の問題点となる。OD の編纂の際、テキストの取捨選択に当たっては当然のことながらバルザックに帰されるものであるかどうかが決定的である。ところが、匿名・変名で刊行され、この作家によるものであるかどうか不明なテキストがかなり存在しており、編纂上、その取扱いはデリケートな問題を惹起する。とりわけ、1829～31年、専業ジャーナリスト時代のバルザックが関与した複数の定期刊行物においては、しばしば無署名ないし変名が用いられており、ここに見られる創作、書評、論説等のうち、どれがバルザックに帰属するかは伝統的に多くの議論的となってきた。ショレの驚嘆すべき博捜によって相当な解明がなされたが¹²、これを反映したエディションが刊行されるには1990年代をまたねばならなかった。他方、青年期およびその後の刊行作品には合作によるものが含まれており、校訂版に再録するにあたっては、バルザックの担当個所を可能な限り確定することが求められる。ショレやブルース・トリーをはじめとした研究者による貴重な論考が蓄積されてはいるものの、関連作品があまりにも多岐にわたっているため、十分な議論が尽くされていない案件も少なくない。こうした場合、編者は参照可能な指標に基づいて判定を行うことになる。僥倖にも原資料が発見されれば問題は解決するが(『破門された人』や『ドン・ジガダス』など¹³)、それは極めて稀である。その他の信頼できる情報(契約書、書簡における明示等)が得られるケースも決して多くない。大抵は二次資料や信頼性が不十分な

⁸ Balzac, « Postface » à *Wann-Chlore*, in *Premiers romans*. Édition établie par André Lorant, Laffont, « Bouquins », 1999, 2 vol., t. II, p. 971-972.

⁹ ただし、出版者によるこのエディションの告知では、「フランスの最も多産な作家がオラース・ド・サン＝トーバン名義で書いた作品」という惹句が用いられており、サン＝トーバンがバルザックであることは当時の読者には明白であった(Thierry Bodin, « Les métamorphoses d'Horace ou quelques avatars romanesques de Jules Sandeau », *ABI*1984, p. 20)。

¹⁰ Roland Chollet, « Éditer l'autre Balzac », in Thierry Bodin (dir.), *Pour Balzac et pour les livres. Hommages à Roger Pierrot*, Klincksieck, 1999, p. 74.

¹¹ *Ibid.*, p. 83.

¹² Roland Chollet, *Balzac journaliste*, Klincksieck, 1983.

情報源を頼りにし、時期的な妥当性や内的検討を駆使して、バルザックによるものかどうか同定作業を行わざるを得ないのであり、そこに不確実性が伴うのはやむを得ない。これはバルザックの校訂版の編纂者を常に悩ませてきた問題である。実際、校訂版に収録され、バルザックの創作をめぐる解釈の対象となってきたテキストが、後にこの作家によるものでないと判明するケースがいくつも生じている¹⁴。

第三の点として、現在までに判明している範囲でも、これら諸作品の驚くべき多様性という特徴がある。多種多様で、ジャンル、テーマ、イデオロギー的傾向を異にする作品や記事からなる膨大なテキスト群は、批評家や研究者に夢を与えると同時に困惑させる特異な混沌状態を呈している。バルザックの芸術的、知的営為の全体像をここからいかにして理解していくかは自明でない。しかし、それだけ強度の高い探索を要請するこれらの作品群は、バルザックのエクリチュールの布置を従前とは異なる相貌の下に現出させる契機となりうるのではないか。実際、そうであればこそ、これらの困難にもかかわらず、多くの個別的な調査や分析の対象となり、その輪郭や分節の問題がたびたび問い直されてきたのである。

2. 刊行小史

実際、作者自身がそのコンセプト、構成、配列に長らく腐心して制作した『人間喜劇』の場合と異なり、ODの集積と配列操作は編纂者の意図や技量に大きく依存することになる。生成論の原点に立ち返るならば、そもそも「テキスト」なるものは所与のものとして存在しているのではなく、構築物として初めてそれとして現れてくる（ジャック・プチ「テキストなるものはない」¹⁵）。まして、バルザックにおける拡散的な「その他の諸作品」ともなれば、それをどう取舍選択して配材し、いかに一つの刊行物となすかは横断的な解釈行為と編集操作なしには不可能な実践である。興味深いことに、バルザックの作品に関する歴代の総合的エディションは、ODを排して『人間喜劇』のみの刊行に終始することは決してなく、

¹³ 次の論文を参照。Jean-Pierre Galvan, « Documents nouveaux sur quelques œuvres de Balzac », *ABI*1985, p. 7-18. 『ドン・ジガダス』では、発見された校正刷りにより、グラモンが作品の下書きを行い、バルザックがこれを校訂して仕上げたとするトリーの仮説（Bruce Tolley, « Une histoire amoureuse et Dom Gigadas », *ABI*1967, p. 171-176）が証明された。『破門された人』に関しては、草稿の確認により、バルザックが1823～24年の段階で冒頭から12章の途中までを執筆し、後にペロワがこれを補筆して完成させたことが判明した（René Guise, « Les enseignements du manuscrit de *L'Excommunié* », *ABI*1985, p. 19-29）。

¹⁴ たとえば1831年に『メルキユール・ド・フランス』に掲載された批評記事「歴史小説と『フラゴレッタ』について」はコナール版に収録されている（*Œuvres complètes de Honoré de Balzac, texte révisé et annoté par Marcel Bouteron et Henri Longnon, Louis Conard, 1912-1940, 40 vol., t. XXXVIII, p. 205-207*）。「世界を映し出す鏡」としての文学に論及しているこのテキストは、バルザックのレアリスムの美学を証するものとしてしばしば援用されてきた（たとえば Pierre Laubriet, *L'Intelligence de l'art chez Balzac*, Didier, 1961）。しかし、ロラン・ショレはバルザックが執筆した可能性はないとしてプレイヤード版のODの掲載対象から除外している（Balzac, *Œuvres diverses. Édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990 et 1996, 2 vol.[以下 *Pl. OD* と略], t. II, p. 1360-1361）。*

¹⁵ この問題については次の論説を参照。Louis Hay, « Le texte n'existe pas ». Réflexions sur la critique génétique », *Poétique*, n° 62, 1985, p. 147-158.

必ずこれらのマージナルな作品群に多かれ少なかれ取り組んでいる。したがって、そこに編集の挙措の創造性が現れてくるのである。OD がどのように構築されてきたのかを跡付けることは、バルザックの作品に対する理解がどう変化してきたかを検証することになろう。以下、刊行小史の記述を試みる。

バルザックの没後、『人間喜劇』以外の作品の刊行を最初に企画したのは、生前に懇意であったアルマン・デュタックである。『ル・シエークル』の主宰者であったこの編集者は、1839年、作家が初めて『人間喜劇』の作品名を記した全集版のプランを提示した相手であるが、この企画は実現せず¹⁶、『人間喜劇』はフルヌらによって刊行された。デュタックはバルザックの没後、作品の権利者となったバルザック夫人（ハンスカ夫人）の許諾を得て全集版の刊行を企図し、OD も含めた作品群の集積を図った。その際、バルザックと共作を行ったことのあるオラース・レッスンヤルポワトヴァン・ド・レーグルヴィル（ヴィエレルグレ）に情報提供を依頼し、かつシャンフルリヤポール・ラクロワ（愛書家ジャコブ）の協力を得てOD の作品リストの作成にあたっている。しかし、協力者たちの記憶が曖昧で、また情報整理が粗雑であったことから、完成したリストには多くの誤謬が紛れ込み、これがのちに意外な形で尾を引くことになる¹⁷。デュタックは作業の途中で没し、この全集版の計画は立ち消えとなった。結局デュタックがこの計画に関連して実現できたのは、ギュスターヴ・ドレの挿絵による『コント・ドロラティック』（1855）の刊行のみであった。

他方、『人間喜劇』フルヌ版の版權を買い取ったアレクサンドル・ウシオー（フルヌ書店の元番頭）は1853～55年にいわゆる「ウシオー版」¹⁸として『人間喜劇』18巻（フルヌ版17巻の再版および新たに編んだ1巻）を発行し、さらにここに二巻を加え、それぞれ戯曲作品（「総序」でほのめかされた二作品以外に『パメラ・ジロー』、『継母』を収録、1865年の再版時にはさらに『山師』を追加）と『コント・ドロラティック』の収録を行っている。

ところがその間に、大衆版であるマレスク版（1851～53年）が既に『人間喜劇』以外の多数の作品の刊行を実現していた¹⁹。『役人』（『役人の生理学』）、『食料品商』（『フランス人の自画像』にバルザックが寄稿した一編）、晩年の戯曲作品群、そして青年期の小説作品群である。

そして1869～76年、レヴィ書店による全集版の刊行となる²⁰。これはロヴァンジュール子爵が協力者として編纂に携わった大部のエディションとして知られる。戯曲作品群（第18巻）、『コント・ドロラティック』（第19巻）、初の書簡集（第24巻）に加え、20～23巻で初めてOD の名称のもとに総計250件ほどのテキストが集められ、「短編集」、「分析的試論」、「人相学とパリ論」、「素描とファンタジー」、「文人評と文芸批評」、「裁判記事」、「歴史・政治研究」という分類が設けられている。たとえば最後に挙げた「歴史・政治研究」の項には、バルザックが経営と編集主幹を担当した『ルヴュ・パリジエンヌ』に掲載された記事および掲

¹⁶ Balzac, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, p. 484.

¹⁷ Bruce Tolley, « Les *Œuvres diverses* de Balzac (1824-1831) », *AB1963*, p. 32-36.

¹⁸ *Œuvres complètes de H. de Balzac*, Alexandre Houssiaux, 1853-1855, 20 vol.

¹⁹ *Œuvres illustrées de Balzac*, Marescq et Cie, 1851-1853, 10 vol.

²⁰ *Œuvres complètes de H. de Balzac*, M. Lévy frères, 1869-1876, 24 vol.

載を予定していた記事が全て収録されている。また、フルヌ版で削除された各作品の序文は「文人評と文芸批評」に収録されている。しかし、このエディションの編纂作業の際、かつてデュタックが作成していた作品リストがラクロワを介して編集者たちにもたらされ、それを参考にしたことから、バルザックに帰されるかどうか曖昧なテキストがそこに大量に取り込まれた²¹。編集者による緒言では、バルザックによらないものは含んでいないと断言がなされているが²²、これは大いに事実と異なる。こうしてデュタックらによる不正確な作品リストが淵源となり、後のエディションにおける混乱を引き起こすこととなるのである。

以後、本格的な学術校訂版の時代が到来する。プトロン&ロンニョンによる大部のコンナール版は、初の解説付きのバルザック作品集として知られる²³。『人間喜劇』以外には戯曲作品（『夫婦学校』を初収録）、『コント・ドロラティック』、そしてODによって構成され、38～40巻の三巻がODに充てられている。ここでは時系列順の配列が採用されており、テーマ別の分類は行われていない。バルザック自身が経営・主幹を務めた『クロニック・ド・パリ』と『ルヴュ・パリジエンヌ』についてのみ、関連テキストが各々まとめられている。レヴィ版と比べても収録点数がさらに激増し、とりわけ『フュヨン・デ・ジュールノー・ポリティック』については「バルザックによる記事」（51件）のほか、「バルザックによる可能性がある記事」（41件）も補遺として収録されている。掲載テキストの総数は350件ほどに及び、現在に至るもバルザックのエディションの中で最も収録点数の多いものとなっている。

一方、『人間喜劇』を独自の配列で提示したベガン&デュクルノーによるエディションでは²⁴、第14巻でODと銘打って67件のテキストを収録しているほか、『コント・ドロラティック』と戯曲2作品（第13巻）、自序集と青年期の3作品（第15巻）、書簡の抜粋（第16巻）を刊行している。

モーリス・バルデーシュの主幹によるクラブ・ド・ロネットム版においては²⁵、計7巻が『人間喜劇』以外の作品に充てられている。『コント・ドロラティック』、戯曲作品（晩年の作品のほか、補遺として青年期の習作を収録）、そして4巻がODで、200件ほどのテキストが大まかな時系列を考慮しつつテーマ別に分類されている。第25巻では青年期の小説の習作などのほか、補遺として「哲学ノート」を初めて収録。第26巻は習作の続きと1829～31年のジャーナリスト専業時代の寄稿記事で、これは掲載紙ごとにまとめられている。同巻の補遺にはバルザックに帰されるかどうか不確実とされるテキストが収録されている。続いて第27巻にはバルザックが関与した正統王朝派の諸新聞への掲載記事やその他の記事（『クロニック・ド・パリ』の時期まで）が掲載されている。最終巻である第28巻は『フランス人の自画像』への寄稿原稿に始まり、『ルヴュ・パリジエンヌ』掲載記事、その他の「生理学もの」

²¹ Bruce Tolley, « Les Œuvres diverses de Balzac (1824-1831) », *op. cit.*, p. 33.

²² « Avertissement des éditeurs », in *Œuvres complètes de Balzac*, *op. cit.*, t. 20, p. 2.

²³ *Œuvres complètes de Honoré de Balzac*, texte révisé et annoté par Marcel Bouteron et Henri Longnon, *op. cit.*

²⁴ *L'Œuvre de Balzac publiée dans un ordre nouveau*, sous la direction d'Albert Béguin et de Jean-A. Ducourneau, Formes et reflets, 1950-1953, 16 vol.

²⁵ *Œuvres complètes*, édition nouvelle établie par la Société des Études balzaciennes, sous la direction de Maurice Bardèche, Club de l'Honnête Homme, 1955-1963, 28 vol. (Nouvelle édition revue et corrigée, 1968-1971, 24 vol.)

のテキスト、そして晩年の雑多な文章を掲載している。補遺として、熟年期の途絶断片や創作ノート『パンセ・主題・断片』の転写版が収められている。ただし、多様な作品と関連資料の掲載に配慮しながらも、本文と補遺との収録区分の判定基準が一貫せず、恣意性が見られる。

ロラン・ショレの編纂によるランコントル版では²⁶、『コント・ドロラティック』（25～26巻）、戯曲作品（28巻）と青年期の小説4作品（29～30巻）が収録されている。

J.-A. デュクルノー主幹によるビブリオフィル・ド・ロリジナル版では²⁷、『コント・ドロラティック』（第20巻）に加え、ルネ・ギーズの編纂による戯曲作品集（21～23巻）が収録され、バルザックの全戯曲作品がここに初めて集成された。第24巻以降はODと題され、計100作品ほどを収録している。まず、「長短編小説」が1巻と半分を占める。第24巻は青年期の習作と刊行作品、第25巻は熟年期の物語作品（大半は未完作品）である。完成していれば『人間喜劇』に属し得た断片も含まれている。同巻は他に「分析的研究」と『正直者法典』を収録している。第26巻は「ファンタジーと歴史作品」と題され、「カリカチュール、素描、ファンタジー」、「ポルトレ、生理学、モノグラフィー」、「歴史作品」のサブカテゴリーを持つ。この後にはハンスカ夫人への手紙（29～32巻）が収められている。予定されていた27～28巻（ODの続き）と33～34巻（批評的資料）は刊行されなかった。

そしてようやくプレイヤー版ODの到来となる。次項で詳しく検討する。

3. プレイヤー版ODの特徴

ピエール＝ジョルジュ・カステックスの差配によるプレイヤー版のODは²⁸、カステックス自身の『人間喜劇』の画期的なエディションの延長上に、編集方針や資料の提示方法を洗練させているところに特徴がある。雑多な作品群の集積ではなく、一貫した構造的なエディションという方針が深化され、また全ての収録作品に対して解説的な注釈が付されていることから、ODの刊行史において決定的に重要な試みとなっている。ニコル・モゼ、ルネ・ギーズ、ロラン・ショレが編纂作業にあたり、全三巻の予定のうち、二巻が刊行され、およそ150件のテキストを収録している。第3巻の未刊行の問題については後述する。同エディションの編集上の大原則は、収録対象をバルザックによるものであることが確実なテキストに限定するというもので、かつてない厳密な選定作業が行われている。例えば、長らくバルザックによるものとして複数の校訂版に収録されてきた「モリエールの生涯」のようなテキストが、この作家に帰属するという確たる証拠がないとして除外されている²⁹。また、帰属に曖昧性の残るテキストのいくつかは補遺として収録されている。このエディションにおける作品配列は、1) クロノロジー、2) 生成過程、3) 関連するシリーズ別の三つ

²⁶ *Les Œuvres de Balzac. Préface et notes de Roland Chollet, Éditions Rencontre, 1958-1962, 30 vol.*

²⁷ *Œuvres complètes illustrées de Balzac, édition dirigée par Jean-A. Ducourneau, les Bibliophiles de l'Originale, 1965-1976, 30 vol.*

²⁸ 書誌情報は前掲。

²⁹ この判断の詳細については次の論文を参照。Roland Chollet, « La "Vie de Molière". Analyse d'un texte apocryphe », *ABI1996*, p. 95-116.

の点を考慮した上で決定されている³⁰。これはクラブ・ド・ロネットム版の方針を参照し、さらに整理したもののみなすことができる。ただし、いくつか例外が見られる。初期刊行小説と壮年期の戯曲作品はここには含まれていない。これらはそれぞれ別途エディションが必要であると説明されている³¹。初期刊行小説に関してはアンドレ・ロランによるラフォン社のエディションが利用可能であるが³²、壮年期（主として晩年）の戯曲作品についてはビブリオフィル・ド・ロジナル版以後、版本は更新されていない。他方、『人間喜劇』に収録予定であったが途絶したテキスト、初版等での序文は、プレイヤードの『人間喜劇』のエディションに既に所収されているため、ここには含まれていない。ロラン・ショレはこれらのテキストも本来ODに収録されるべきものであるとしている³³。この点で、『人間喜劇』のエディションがODのエディションの領分に侵食しているのである。もう一つの例外措置は『コント・ドロラティック』である。クロノロジー順に従わず、第1巻の冒頭部に置かれており、他のODの作品とは一線を画すものとして扱われている。上述のように、従来の大規模校訂版では大別して1)『人間喜劇』／その他、2)『人間喜劇』／それ以外の主要作品（青年期の小説、『コント・ドロラティック』、壮年期の戯曲）／その他という括りが設けられてきた。プレイヤード版ODは2の三分類に基づいた上で、青年期の刊行小説と壮年期の戯曲を収録せず、一方、『コント・ドロラティック』には「特別席」を与えていることになる。

したがって、プレイヤード版第1巻での本来的なODの収録項目は「初期習作 1818～23年」である。これはジャンル別に哲学、小説、戯曲、詩の四種に分類されている。哲学的な習作として「哲学者の読解」という項目が設けられ、若きバルザックが哲学書の理解に取り組んだ際の読書ノートが収録されている。こうして、小説・戯曲・詩と同レベルで哲学的テキストを収めたことにより、バルザックの修業時代、とりわけその初期における哲学的思索の重要性に対する再認識を促していると言える。第2巻では、「第一部 1824～30年」として「政治ジャーナリスト バルザック」（『フュトン・リテレル』掲載の記事を初収録³⁴）、「歴史と小説の間で」、「戯曲、詩の断片」の諸作品を収録。「第二部 1830年の転回」では、専業ジャーナリスト時代のバルザックの記事や作品が掲載紙別に収録されている。第二部の末尾には「政治の発見」という項目が設けられ、『ヴォールール』に掲載された「パリ書簡」と論説文「二つの内閣の政策についての調査」を収めている。これは「第三部 1831～34年」の第一項目「正統王朝派新聞におけるバルザック」につながるように工夫された配列である。続いて「文学とファンタジー」（小説やファンタジー的な傾向を持つ作品）、「ジャー

³⁰ Roland Chollet, « Éditer l'autre Balzac », *op. cit.*, p. 83-84.

³¹ *Pl. OD*, t. II, p. XV.

³² *Premiers romans*, *op. cit.*

³³ Roland Chollet, « Éditer l'autre Balzac », *op. cit.*, p. 79.

³⁴ 『フュトン・リテレル』はオラース・レソンがバルザックと組んで創刊した新聞で、バルザックは1824年に同紙に寄稿している。かつてデュタックらによって作成された書誌の不備に端を発する情報の混乱から、このことが判明するのが遅れた。ブルース・トリーの調査の後、ロラン・ショレによってバルザックの寄稿状況が解明され、ようやくプレイヤード版ODにおいて採録に至っている。Cf. Bruce Tolley, « Les Œuvres diverses de Balzac (1824-1831) », *op. cit.*, p. 36-39 ; Roland Chollet, « Balzac et le Feuilleton littéraire », *AB1984*, p. 71-106.

ナリズムと哲学の混交」(記事や公開書簡)という構成となっている。

ところが、このエディションの企画は中断してしまい、第3巻はいまなお刊行されていない。この最終巻は、第2巻が収録対象とした年代の後の時代、すなわち1835～48年の諸作品を収録することになるはずである。予想される収録内容として、まずバルザック自身が運営した『クロニック・ド・パリ』と『ルヴュ・パリジエンヌ』の二誌に掲載した作品や記事、そして生理学もの・パノラマ文学に属する諸作品(『フランス人の自画像』、『動物の私的公的生活情景』、『大都市』、『パリの悪魔』に寄稿した作品および『役人の生理学』)があろう。それ以外には論説文や公開書簡を中心に様々なテキストや断片が何らかの項目分けのもとに収録されるはずである³⁵。この時期のバルザックの刊行作は原則として実名の署名を伴っているので、作者同定の問題が発生するのは例外的な無署名のケースに限られる。『クロニック・ド・パリ』と『ルヴュ・パリジエンヌ』の収録テキストの大半がそれに当たる。前者の場合、バルザックによるテキストとベロワやグラモンら執筆協力者の担当個所を峻別するのは容易でない³⁶。しかし、後者はバルザックがほぼ独力で執筆していると考えられる³⁷。他方、1841年に『動物の私的公的生活情景』の枠組で発表された「最良の政体を求めるパリ雀の旅」はジョルジュ・サンド名義であるが、バルザックによるものであることは間違いなく、サンドはテキストの末尾に数行を加えたのみと考えられる³⁸。

4. 課題と展望

このように、プレイヤー版OD第3巻のおよその収録内容を想定することは可能であるが、実際に断簡零墨に至るまで作者同定を行って収録対象リストの内容を詰め、厳密な校訂作業を施し、配列を考案するとなると、膨大な編集上の労苦が求められることは疑いない。それまでの間、この時期のバルザックのODを信頼できる版本に基づいて読むには、クラブ・ド・ロネットム版、ビブリオフィル・ド・ロリジナル版、トゥルニエ版などを参照する必要がある³⁹。他方、上述の通り、このシリーズに含まれない青年期の小説についてはアン

³⁵ « Brillat-Savarin », « Rois de France », « Lettre à M. Maurice Schlesinger », « Lettres de Jean Faitout », « Lettre sur le procès de Peytel, notaire à Belley », *Notes remises à MM. les députés composant la commission de la loi sur la propriété littéraire, Mémoire sur la situation actuelle de la contrefaçon des livres français en Belgique, Les Fantaisies de la Gina*, « *La Chine et les Chinois* d'Auguste Borget », *Tony-sans-soin, Une prédiction*, « Lettre à M. Hippolyte Castille, l'un des rédacteurs de *La Semaine* », « Lettre sur Kiew », « Lettres capitales par Publicola », « Profession de foi politique », « Lettre sur le travail » など。

³⁶ Alex Lascar, « Observation de la *Chronique de Paris* », *AB2018*, p. 331.

³⁷ Georges Pradalié, « Balzac journaliste », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, tome 8, n° 4, 1961, p. 251.

³⁸ Balzac, *Nouvelles et contes*. Édition établie, présentée et annotée par Isabelle Tournier, Gallimard, 2005-2006, 2 vol., t. II, p. 1838.

³⁹ トゥルニエの編纂による短編集(前掲)は後に『人間喜劇』に組み込まれたものを含め、バルザックの短編のフィクション作品を時系列に沿って収録している。編集コンセプトの独創性に加え、*Le Pacte* や *Le Droit d'aïnesse* といった従来の校訂版に未収録であったテキストを初めて所収したほか、詳細な作品解説が提示されており、バルザックのエディションの新たな可能性を開拓した試みとして重要である。

ドレ・ロランによる充実したラフォン版が刊行されたが、壮年期の戯曲作品に関してはビブリオフィル・ド・ロリジナル版以降、エディションの刷新がなされていない。したがって当分は、バルザックの作品群全体を参照しようとする場合、制作年代や編集方針が大きく異なる複数の校訂版に依拠しなければならない。プレイヤー版「新版」の『人間喜劇』の刊行が完結してから40年が経過したいまなお、エディションの問題はバルザック研究者に大きな課題を突き付けている。ODの問題は結局のところ校訂版のバルザック「全集」をいかに刷新するかという問いを提起するのである。もちろん小論でそれを包括的に扱うことは不可能なので、ここで論を閉じるにあたり、今後、ODの校訂版に求められる具体的な検討課題を数点挙げるにとどめる。

まず、バルザックのテキストであることが判明しながら校訂版に未収録の作品に対する処遇である。ロラン・ショレとステファンヌ・ヴァッションは青年期の作品を対象とした当時の書評や紹介文を網羅的に収集、刊行した⁴⁰。両者はその解説で、匿名記事の中にバルザック自身が書いたものが相当数含まれていることを外的および内的指標の検討によって明らかにしている⁴¹。同書はしたがって、青年期の作品の受容を論じる書であるとともに、従来の校訂版に未収録のバルザックのテキストを刊行しているところにも特徴がある。これらのテキストは年代的にはプレイヤー版ODの第1巻および第2巻の対象になりうるものであり、今後、新たなOD校訂版が企画される場合に考慮されるべきテキスト群である。また、ヴィエレルグレ単独名義で刊行された作品 *L'Anonyme ou Ni père ni mère* (1823) においてバルザックの関与が明らかになったとして、2003年にマリー＝ベネディクト・ディーテルムによるエディションが刊行された⁴²。青年期の作品の包括的な校訂版への収録も検討が必要であろう。

より困難な課題として、作者確定問題において審議中の諸作品に対する継続調査の問題がある。上記の通り、案件は多岐にわたり、研究者による判定にまだ決着がついていないケースが少なくない。たとえば、ニコル・モゼによってバルザックの作品ではないかとされた *Le Droit d'ainesse* (1826) は⁴³、プレイヤー版ODでは十分な証拠がないとして掲載されなかったが⁴⁴、トゥルニエ版の短編集では収録対象となっており、再審議の余地が大きい。

また、『人間喜劇』とODの境界に位置するテキスト群に対する編集的判断の問題も挙げられよう。プレイヤー版では、『人間喜劇』の諸作品の成立過程において書かれた序文等のパラテキストは『人間喜劇』のエディションに所収されたが、『魔王の喜劇』のように『哲学的長短編集』に収録されながらも『人間喜劇』に含まれなかった作品——つまりマクロジェネティック的には『人間喜劇』の前テキストに属するとみなせなくもない——はODに収録された⁴⁵。その一方で、『田舎ミュージック』の「オランピア」の挿話に再利用された

⁴⁰ Roland Chollet et Stéphane Vachon, *À l'écoute du jeune Balzac*, Lévesque / Presses Universitaires de Vincennes, 2012.

⁴¹ *Ibid.*, p. 155-168.

⁴² *L'Anonyme ou Ni père ni mère*. Texte présenté, établi et annoté par Marie-Bénédicte Diethelm, Le Passage, 2003.

⁴³ Nicole Mozet, « Ce texte est-il de Balzac ? », *AB1980*, p. 269-277.

⁴⁴ *Pl. OD*, t. II, p. XVII.

『未詳の作者による帝政時代の小説断片』はドキュメントとして『人間喜劇』のエディションに収録されるとともに、重複を厭わず OD にも一作品としてのステイタスで収録されている⁴⁶。

これらを勘案すると、書籍版によるエディションにもまして、電子版の充実が望まれるところである⁴⁷。長期にわたってなされるであろう作者同定作業による流動的な情報（新規認定あるいは除外）を反映してコーパスの増減を調整し、また未確定物件や『人間喜劇』との重複部分については複数の視覚情報化が可能になるエディションの構築と継続的かつ柔軟な更新が求められる。

このように問題は山積しているが、逆に言えば主要なテーマや作品について研究が深化されてきたバルザックの文学的事績において、子細なコメントリーの対象となっていない大きな未踏の地が残されているのである。輪郭が曖昧なこれらの多量のテキストは還元不可能な多様性を提起しており、互いに矛盾する要素さえ見られる。したがって全体としてサンテーズを拒む作品群であり続けており、バルザックの作品制作のキャリアをめぐる一つの総合的な視座のもとに全てを捉え切れるかどうかは今後の研究の重要な争点となろう。実際、プレイヤード版 OD に総合的な解説文が付されていないのは徴候的である⁴⁸。社会風俗を論じた生理学ものやパノラマ文学のテキストのように『人間喜劇』と密接な相互影響関係を持つものもあれば（それらのいくつかは改変を経て『人間喜劇』の作中に取り込まれている）、そこには直接的に表れてこない要素を色濃く見せる作品群、例えばファンタジー的なフィクション作品、政治動向の時事解説、社会運動への参入を意図した趣意書なども存在している。OD の諸作品は、バルザックのエクリチュールの全体的な布置がいまもなお大きな問い直しが必要とされるべき対象であり、すぐれて開かれた問題系であり続けていることを示している。

* 本研究は JSPS 科研費 JP18K00474 の助成を受けたものである。

(2021年10月31日受理, 11月16日掲載承認)

⁴⁵ *Ibid.*, p. 1087-1121.

⁴⁶ *Pl.*, t. IV, p. 1359-1365 (一部省略されている); *Pl. OD*, t. II, p. 1190-1177.

⁴⁷ 現在までのところ、バルザックの作品の電子版は『人間喜劇』を中心としている。電子版の展開の動きとしては、ニコル・モゼら国際バルザック研究会のメンバーによる『人間喜劇』フルヌ版に基づく CD-Rom 版（後にウェブ掲載：<http://www.v1.paris.fr/commun/v2asp/musees/balzac/furne/presentation.htm>）、アンドリュウ・オリヴァーによる紙媒体と電子データのハイブリッドの生成版エディション（Toronto, Éditions de l'originale, collection « Les Romans de Balzac »）を嚆矢とし、近年ではアンドレア・デル・ルンゴによるウェブ版の刊行プロジェクト eBalzac (<https://www.ebalzac.com>)、ルドルフ・マレーとジョエル・ズュフレによる生成版を掲載したウェブサイト Variance (<http://variance.ch>) など活発な動きを見せている。しかし、オリヴァーによる『コント・ドロラティック』を例外とし、OD の取り込みは進んでいない。これらの電子版の進展状況については次の特集を参照。Andrea Del Lungo et Takayuki Kamada (dir.), *The Balzac Review/Revue Balzac*, n° 4, « l'édition/Publishing », Classiques Garnier, 2021.

⁴⁸ 第1巻の冒頭のカステックスによる解説はこの巻号のみを扱ったものにとどまっている (*Pl. OD*, t. I, p. IX-XXIX)。

